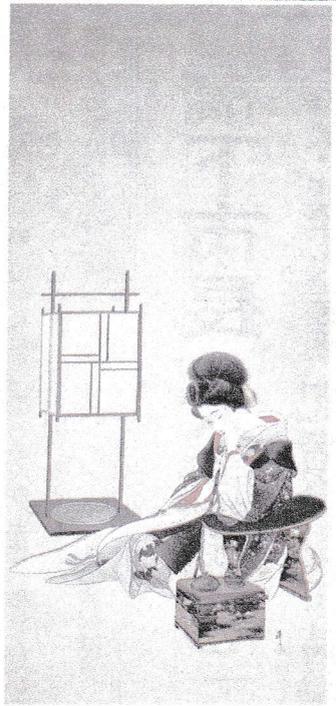


艦には「浄瑠璃」、菱田 岡永洗が挑んだのが一新で見えるが、繊細な描写に優さを身にまとう哀



富岡永洗「新内(行灯)」

そのだとすれば、岡倉の意図したところ、すなわち、音の聞こえてくる絵を描くにはどうしたらよいかという問いに對しての、永洗なりの答えだったのかも知れない。(軸装、126・0×57・4寸、福富太郎コレクシヨ ン資料室蔵)

文 化

スキーに親しみ、幼稚園の大会では優勝もした。しかし8歳だった1945年8月9日、旧ソ連が参戦。空襲警報のサイレンに追われながらリュックサックひとつで生家を脱出し、親戚を頼って函館で暮らし始めた。東京の大学を経て再び北海道で専門学校で教員として働いてきた。

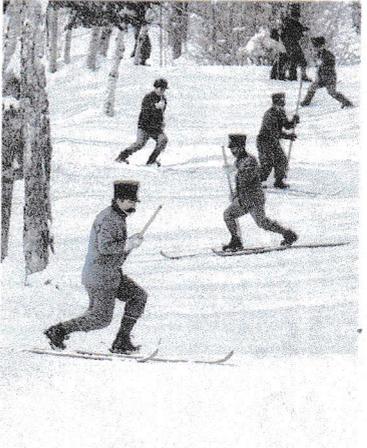
引き揚げ後もスキーは最も身近で得意な趣味。学生時代はアルペンスキーの大会にも出場したが、樺太の幼稚園時代のよきに優勝はできなかった。地元の教員らによる五輪競技の手伝いに参加し

明治伝来、一本杖スキー

◇オーストリア軍人から伝授された滑走法を再現◇

原田 広 記

木製のスキー板を履き、2層ある竹ザオの杖を一本、両手で握って斜面に突き立てながら雪の上を滑る。100年以上前、オーストリア・ハンガリー帝国の軍人、テオドル・フォン・レルヒが日本にスキーを伝えた当初のスタイルを復活し、軍服を模した衣装を着て実際に滑っている。



レルヒにふんして滑走する筆者(手前)



気が増え、そこで「スキーの発祥を知っているか?」「知らないな。調べてみなくては」ということになった。地元の図書館で歴史をひもとくと明治末期の1910年、少佐だったレルヒが日露戦争の戦勝国の視察という目的で来日。新潟や北海道の部隊に招かれて、スキーの技

術を伝授したことを知った。北海道では12年2月に約3週間、旭川の師団で道内から集まった軍人や営林署、電力会社の人、教員らに指導したという。これらがスキーの日本への伝来とされる。レルヒが伝えたスキーは現在のスタイルとは多少異なる。最大の特徴は、いまは両手に一本ずつ持つストックが、一本だけだった。明治期の地元紙「北海道新聞」の冬場の記事はくまなく閲覧し、レルヒ以外の北海道でのスキー史も調べた。レルヒが来日する前の09年には、現在の北海道大学でスイス人教師のハンス・コラーがスキー道具一式を授業で紹介している。ただコラー自身は滑ることができず、教材として見せただけだった。一方、樺太では「露式寒敷」と呼ばれたスキーの原型が19世紀にはあったようだ。軍服模した衣装で実践レルヒの訓練を受けて作成した当時のスキー教

が仕込まれ、それ自体も武器になった。当時のスキー板はサクランボなど固い木材を削った単板。軍靴のつま先部分だけを金具で板に固定し、かかとは板から離れるノルディック式だ。板の裏にアザラシの毛皮を張り、毛並みによる摩擦を利用して緩い斜面を登ることができるようになった。

85年、札幌・藻岩山のスキー場でのイベントに合わせ「藻岩レルヒ会」を立ち上げ、当時の道具、服装、滑走法を披露することになった。板は自衛隊に似たものがあつたので取り寄せ、竹のストックは自作。レルヒの写真も参考に、オーストリア・ハンガリー帝国の軍服を再現し、付けヒゲも用意した。これが好評を博し、毎年3月ごろに「レルヒまつり」を開くようになってきた。

抄 遊 交

北海道日大 たにない。「この目で世界を見た」。緊張して日大(現札幌)3 事務局長室を訪ねた。年生のときに「メキシコオ 気持ちは伝えると、浅利さんにはひと言「我が校の名譽だ。ぜひ行きなさい」と力強く送り出してくれた。メキシコ、米国のための口頭試験もあつたが、浅利さんの言葉に押されて自信を持って答えることができ

私の履歴書

を覚える。

さて大きな期待を背負った 一家(両親と妹、弟の現段四 歌舞伎座に出ていた。客席に 猿翁郎ができ、三代目段四郎 祖父の「敵討天下茶屋聚」が

人 恩

盛 貴 人の言葉に押されて自信を持って答えることができ